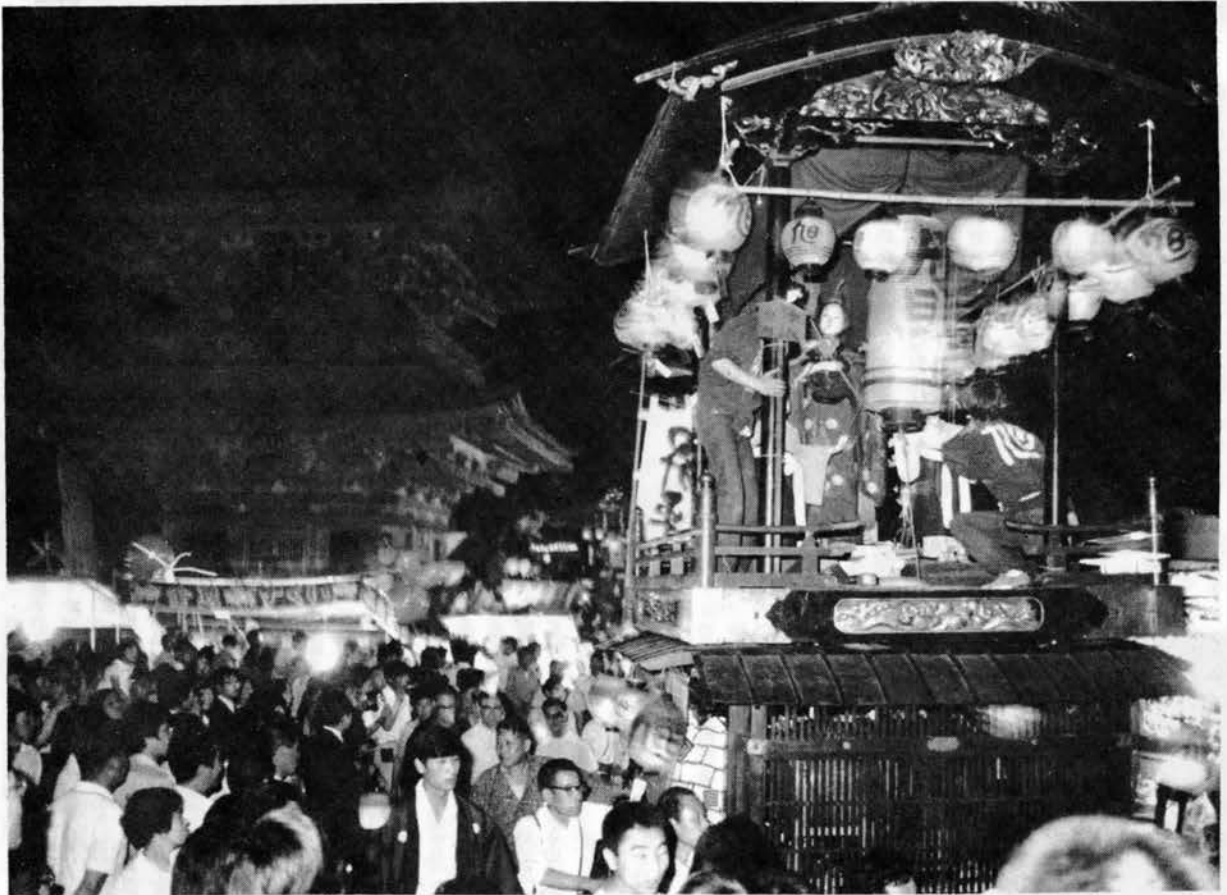


# 山と博物館

第18巻 第7号 1973年7月25日 大町山岳博物館



若一王子神社祭礼の山車

撮影 丸山隆士

## むなしき自然

ここ数年、山岳博物館を訪れる修学旅行の学校の数が年々ふえている。

今までのお定まりの名所旧跡めぐりの傾向が次第に敬遠され、緑の中へ、空気のさわやかな自然の中へのコースが注目されはじめた結果であろう。

この傾向そのものは大いに結構なことであると思う。

また都会地の学校では、北ア山麓に林間学校用の宿泊施設を作り、毎年一週間から10日くらいの日程で生徒を送りこみ、自然の中の生活を楽しませているところもある。

ある高校などでは、修学旅行のコース選定なども生徒が中心になって選び、学校側はそれについてアドバイスを与える程度で実施しているそうである。

昔の学校側が用意した「おしきせコース」の修学旅行とは格段の違いである。

さて、その生徒が中心になって選定した緑の中を行くコースに、同行した関係者に、自然の中でさぞ満足しているだろうと聞いてみると、意に反して、緑の中の修学旅行は間が持てないというのである。

右をみても左をみても緑、近代的なレジャー機械や場所はどこを探してもない。生徒の大半は自然——木や草、昆虫などについても殆んど知識も興味も持っていない。

だから、いきおい部屋やバスの中でゴロゴロして暇を持て余している。そしてたいいていの生徒が退屈して早く帰りたいともらすといった。

付添の教師もいることはいるが、自然の実物に対する生徒の質問に対し、これまた殆んど答えられないのが普通であるともいった。

退屈して、退屈して帰る修学旅行、一見、自然を求めている修学旅行は、傍目には斬新なアイデアのように見える。

この斬新な修学旅行、時代の流れのうわべだけに乗った底の浅い修学旅行では振り向かなくなる結果にならないだろうか。

(千葉彬司)

# 若一王子神社流鏑馬考

## 仁科政視

明治維新は、第二次世界大戦における敗北後の変動と同じく、いろいろな面に変革を及ぼしたが、大町市の累年行なってきた流鏑馬行事のようなものにも例外ではなかったようだ。

昔は、仁科神明宮の三神主のなかから一騎、仁科氏の分れて宮奉行であった浪田見家から一騎、大町十人衆を代表して曾根原家より一



若一王子神社

撮影 牛越 和男

騎、つごう三騎が出て、旧六月十六日には仁科神明宮、翌十七日には若一王子神社のそれぞれ例祭において、同じ射手が流鏑馬を行ない、その間の八キロの道が遠乗りされている五日町であったのだろう。それを維新後上仲町の伊藤重右工門氏が、射手を一般氏子から選出することを提唱し、私費を投じて津島から何騎もの流鏑馬の馬具や衣裳等を購入し、各町内に寄贈したという。(「大町の夏祭り」より) 「志茂樹博士著『仁科神明宮』その歴史と式年遷宮」には、文化四年十二月(一八〇七)に書かれた横川彌右工門の手記が引かれ、それには「以後検校家よりの一騎の代わりに神明宮の鎮座地である宮本部落の人々の間から、曾根原家からの一騎の代わりに十人衆が交代して出すことになった」とあり、その頃人選における若干の変わりがあったであろうである。それが維新後、「新しく神明宮にあつては、祭事その他を百数十戸の氏子だけで奉仕することになったため、経済的な事情からこの神事を統行することができず、残念ながら廃絶することにした」(前掲書)その結果、人口も多く商家も抱えている大町の王子神社だけで、この神事をつづけてきた。

まず、江戸期における記録に徴しても、射手が童子であることで一貫しており、一つ物のおもかけを残すことは注目される。一つ物というのは、他にかけがえのない貴い物という思ひ言葉であろうとされる。有名なのは京都の八坂神社の祇園祭りにおいて、七月十一日当年の長刀鉾に乗る稚児が、立鳥帽子、水の服装で騎馬で神前近くまで出、稚児のお位「五位」をもらう、いわゆるオクライモライの神事の稚児である。化粧をさせ、頬と額に紅で星を描くのが例となっていた。熊野速玉大社(新宮)の祭りは、もと九月十五、六日におこなわれる。十六日の御船祭りは第一殿結宮の神伊弉冉尊の神霊を御輿に移して行列が立つのであるが、編笠をかぶり、金襴の狩衣に帯を締めて、萱穂十二本に鳥羽玉符十二枚をはさんだものを腰にさし、男に扮した女性の人形が神馬に乗せられ神旗の次に渡る。馬に乗って行く童子の役が大変なため嫌がる者が多くなつての改装であろうが、これも一つ物とよばれている。近江、美濃、三河、播磨等では、頼朝と呼んでいる場合が幾つかあり、頼朝に附会されているが、元来は神のヨリマシというのの誤解であろうと言われている。そ



イタイボボの着付け

撮影 西 沢 要

小さな社殿の飾りのついた張り笠をかむって中踊りする稚児が出るが、これも一つ物とみてよく、移動する時はお供の大人の肩輿に乗る。王子神社の「イタイボボ」は、この一つ物の要素が見られ、まず顔をきれいに化粧し、額に星が二つかかれていたのもそうであるし、三蓋笠の頂に鳥や鳥の羽がついているのも単なる飾りのごとく退化しているが、一つ物などの神のヨリマシが笠の上や腰に鳥の羽根や萱をはさんであつたり、手に幣をもつ習いの痕跡といえる。さらに気のつくことは、白い絹の布を体の前と背後にたくさん着け垂らして、それが赤い装束に映えてまことに清浄でかつ美しいことである。背後のものなど紐を肩掛けにし、それに白布を結びつけ垂らしている。これも見映えのする美しいものにするためという以外に、そのヨリマシとしての神聖を表示する伝承意識が暗暗に働いているものと考えられる。和歌山県那賀郡粉河寺の鎮守の祭に出る一つ物は、馬上の童子のかぶる菅笠に多数のシデと山鳥の尾羽がついているというし、京都府宇治の六月八日の離宮明神の大幣神事に早駆けを演ずる騎手は、山鳥

んなに遠くの例でなくとも更埴市の雨宮神社の祭礼(四月二、十七、十八日)にもきれいに化粧し鳥居も具えた

の羽を立て頭から白紙のシデを深く垂らし、競馬と一つ物の結合を示しているという。その他にも笠などにシデを垂らす例はいくらもある。また王子の射手の場合、藁草履、ゴム底草履、またちまきであるが、もとは藁草履であったものが手に入りにくくなったためであろう。それを足から脱げないように白い布紐でゆわえている。しかし、馬への乗り降りには地上に降すことなく抱きかかえて運ぶ。ヨリマシとしての童子は、土地により土フマズともいわれるように、履物ははいでいても地に足をつけさせないのが常である。

神社の境内に入つての射の神事をみてみよう。地上約一・七米、経十二・三種もある丸太を立て、その上端を二つに割って横木を挿み、その上に七枚のハギ板が扇形に挿し込まれている。ハギ板は縦四十五種、幅十三種ほどのかなりの大きさのものである。その周囲四隅に立てた杭にはソヨギが添えられそれに幣を下げ、各杭の間はシメ縄が張られていく。諸方の流鏑馬でも三方所というのが多いようだ。この板はかつての山奉行であった野口の矢口氏より高瀬川入りの明神山という地籍から成って供進され、弓を射る矢竹は八坂村一之瀬の勝野氏が供進するを常としたという。共に人里離れた清浄の地からの採取であり、的は西の山から、矢は東の山からというように一方に偏していないところにも何らかの配慮があったものであろうか。何れにせよ古風で厳しい神祭りの心が看取される。

二度廻った後、三回射ち、その後三回は木にさした板を外して氏子惣代であろうか役員の人が手に持って、射手が構えつがえている矢に逆に近づけて当てる。元からこのような仕来りか、中途からの変更であるかはわからぬが、とにかくそこには確実に当たったという姿を求めている。幼い童子が射った矢は時にポロツと的に落ちたり、的の後に大うちわをあてて射てもあらぬ方に飛ぶことがある。それを二度目の三回において確実に当たったものとして納める気持から出たものと思

われる。弓射の神事では、二度射て終りとすがるが、十二回、間の年は十三回という例がかなりあり、六回の数はあまり多くないようである。

弓を射る神事には徒歩(かち)で射るのと騎馬で射るのとあるが、御備射とか御歩射とか呼ばれる徒歩の行事は、圧倒的に一・二月に多く穂高神社(三月十七日)のそのように三月というものはごく少なく、くだって四月・五月が僅かにある。これに対して流鏑馬は三・四・五・九・十・十一の月に広がっており、いくらか秋に多いといえる。春に集中する歩射行事には年占が多いのであるが、それと別に、的に鬼の面を描いたり、蛇の目を書いて悪霊退却によるその年の豊作と俵せを祈るものも多い。ビシャは中国、四国地方では

百々手といわれ、二本を一手として沢山射るからといわれたり、弓を桃の木で作ることにしている所があったりであるが、中に魔当神事とか破魔弓神事とか称しているのは明らか。この除災の意識の濃いことを思わせる。流鏑馬はこのビシャよりその気持は薄れてしまったもの、なかには鹿兒島県肝野郡高山町新富の四十九所神社の旧九月十六日のヤブサメのように、少しでも多く当った方がよいとされ、その年には豊作だといっている所もある。王子神社のヤブサメがどういう意味を担っているのか、見ようにより年占とも悪魔退却ともいえるが、それを明らかに示す徴証が無く如何ともいいがたいが、次のようなことはいえるかと思う。

このヤブサメ行事の祭の行なわれる時期が旧暦で六月十六・七日であるという

#### 撮影 西 沢 要

#### 射の的の村

ことは、この神事を考える前提として考慮すべきことであろう。元来夏祭は、京都の祇園の祭などを中心にしてきた都会的性格のもので、在来の農耕生活に基づく祭が、二、四、九、十月の春秋に行なわれるのとは異なるところがある。在来のものが望ましいことを乞い願う性質があるのに対して、むしろ忌むことを避け払おうとする意識が強い。祇園はいうまでもなく、北野の天神もこれと類を同じくし、石清水の八幡も悪霊を圧伏する神として同系統のものといえる。疫病虫害、風水害の起り易い時期、その源をなす疫神、悪霊を、これらの神の力によつて攘却し、豊作を招来しようとするものである。王子神社の祭の日が動いていないとすれば、魔祓い、豊作祈願の弓祈禱であることも考えてよいと思う。幼い児が放つた矢が、うまく弓弦につがえられず、馬の横に落ちるようなことがあっても、口取りなどの供の者は大声に威勢のよい喚声

をあげる。前記したように、立て木から外した的板を三度矢につけるあたりに、それがうかがえるように思う。鳴絃祈禱と称して弓絃を引くだけで魔を追うものとする行事の所もあり、王子のものも弓矢ともに神聖である点、弓を射る行事そのものが悪霊退却の意をもつていたものかとも思われる。六、七月に行なわれる流鏑馬は、山形県東置賜郡高島町八幡神社が一日早い七月十五日であるような例を除いては極めて少ないようだ。

他地方の例を二つ挙げてみたい。新潟県佐渡島野村粟野江の加茂宮では、四月十五日の祭礼に行なう射神事に出る十才までの童子はイテと呼ばれ、二十戸のなかから順次に当たり、あたるとイテゴモリといつて精進屋に三日籠る。祭の日には馬の背に乗って三的に射る。呼び方も大町と同じで、かつてはかなり奇戒の気持が強かったときく大町の昔の風儀を思わせる。宮城県浦谷町の寛岳白山社は、二百米の山頂にある宮で、この行事は流鏑馬とよばれているが、実は歩射である。山頂の観音堂と白山社は、天台宗の僧侶達に守られ、山岳仏教の姿をもっている由、その祭は旧正月二十五日の夕方、白山社の傍で流鏑馬がなされる。馬に乗るわけではなく、水干鳥帽子姿の五才前後の「おちご様」が子守役「とうじ」につきそわれ、二人で十二矢を射る。これを別の神事によるオミクジと総合して、稲、麦、豆、蚕、天候の予兆を割り出すという。この場合稚児が射るといつても、背後に添う「とうじ」が手を添えて稚児の代わりに射てやるのである。二十余坊の僧侶が金綱の袈裟をまわつて居並び見守る中に厳粛に行なわれるという。

「仁科神明宮」に引かれている文化四年の記録「宮本洪田見庄右工門競馬の一件」の競馬の文字は氣になる。元来競馬は加茂におけるそのように、クラベ馬とかキオイ馬とか呼ばれ、その元は神馬を献上すべく馬を走らせてその力を確かめるのが元で、今日も駈馬とか走馬の神事として残るのがそれである。



それが一方では風流の行事として、馬を飾りたててその行列をみせるものになり、一方では競馬のようになっていった。競馬を文字通りに解釈すれば流鏑馬とは異なるようにもとれるが、しかしこれらの言葉は地方地方によってあいまいな使い方をされたようである。例えば、山梨県下吉田の小室浅間神社のヤブサメ祭においては、氏子の中からクジビキで選ばれた馬はクラベ馬と呼んでいくようにである。鹿兒島県高山町新富の四十九所神社のヤブサメは前に記したが、駟馬と呼ばれている。元地方地方の呼び方であったものが、次第に流鏑馬という一般的な呼称になってきたものと考えられる。

王子神社の流鏑馬において、もう一つ気の一つくことは、かなり風流の気味をもっていることである。昔のものがどんな行列を組んだかはわからないが現在は紋付羽織の人々を前に立て、馬には口取役、うちわ役、笠役、後衛役、弓持役、介添役等が笠をつけ、わらじを履いて従い大名行列的な様相を呈している。これら供人の装束の古風な仕度も人を魅きつける姿である。諸方には、ヤブサメをもとめ、例え秋田県湯沢市の愛宕神社の八月二十三日午後の大名行列は、美しく化粧した少年が稚児として馬に乗り、これを中乗りと称しそれに武者頭、押乗り、十丁弓、鉄砲、五丁弓、合駕籠、鷹匠、薬持がつき、愛宕山からお旅所である町内の旧家の家に向かうというが、これは明和年間以降のものだそうである。稚児はトノサンという由であるが、武家時代を通過する間に一つ物変貌したかたちであろう。

若一王子神社が熊野那智大社第五殿の若宮の祭神天照大神を勧請したものであり、神明宮また同神であることを思うとき、かつて一日のずれをもつて両者を連結した祭礼を行ない、しかもそれら神祭の当家ともいべき三家からヨリマシとなる童子が出たということは、大町地方の歴史をも如実に語る床しい古

儀であった。前代の射手の装束が、狩衣をつけ、手袋、行袴(むかばき)に太刀を佩き扇をさし、重藤の弓をもち、箆には征矢をさし綾蘭笠をかぶって騎馬した由であるが、前記四十九所神社の射手もそれに近い姿で、ただ年令が十二才頃から二十才ぐらいで、額、頬唇に紅をさしているという。或は王子、神明宮のヤブサメの昔は童子というが、現在より若干年令に幅があったのではないかと想像される。

以上他地方の例も挙げつつ、まとまりなく若干の考察を試みたが、最近出版された、宮尾しげを氏著「日本祭礼事典」は全国の各神社の祭礼の日と行事名を列挙してあるものであるが、それからざっと数えてみても、ヤブサメという神事をもつ祭は全国で約九十あ

る。これに洩れているものもあろうし、歩射をヤブサメと称しているものもあろう。童子が乗るか大人が乗るか細かな点はわからないが、右の数である。オビシヤにいたってはそれ倍近く百八十ぐらいおこなわれている。これも有名無実になっていくものや、中味の変わっているものも多かつたが、この数は諸報告よりみても昔はもつと多かつたに推察されあつた。流鏑馬は、もともと神輿以上に普遍的であつた馬を神の乗り物とする信仰があり、また弓射による年占、魔祓いの行事のあつた農村に、中世になって武家に盛んに行われた流鏑馬がとり入れられたもので、そこにヤブサメと称しつつ内容はいろいろである因もあつた。王子神社の流鏑馬は、これら多くの弓射の行事の中にあつて、一方に単純に伸びるのではなく、前記のように、神のヨリマシとしての儀を残すとともに、薄れてはいるが弓折袴の性格を併せもち、しかも、それらをいかにも夏祭らしい風流に近い洗練された美しく楽しいものにしていく点、地方の一小都市の祭行事としては、珍らしい形態と意義をもつていえるといえよう。同時に、これが近い時代の移入などではなく、遡るほどに厳しい信仰の様態であつたことを想像せしめる、溯源遠いものであり、複雑な要素を湛えつつ、一面近畿の文化に親しかつた仁科氏文化の一端を示すところにも価値が認められる。



童子を射る

撮影 西 沢 要

隣県の岐阜県中津川市苗木の流鏑馬は、ごく最近まで神主と重立ち各一騎ずつ出たものであるが、今は馬が無いため廃絶している。それは苗木のヤブサメがさらされている運命である。大町市のものがそうならぬいで、いよいよ盛んであるのは、真に慶ばしい。(蟻ガ崎高校教諭) お詫び 「二ホンカモシカの全国の飼育状況について(2)」は都合により次号に掲載いたします。

### 博物館だより

**夏の自然観察会** 市内の小中学生を対称に開かれます。今までの学校生活からはなれ、のびのびした気持ちで自然の中に入って観察しようというもので、7月31日(火)午前9時30分から午後4時まで行なわれます。参加希望者は、市の児童館へ7月26日まで申しこんで下さい。

持物はおひる、おやつ(50円以内)、えんぴつ、水とうです。雨が降った場合は8月1日に行ないます。詳しいことは博物館か児童館におたずね下さい。目的地は霊雲寺です。

**白鳥をみる会** 去る5月24日に木崎湖でふ化したコブハクチョウのヒナと湖の周辺の自然を観察する会が、7月8日に開かれました。大町の自然を守る会の会員から幼稚園児までの多数が参加し、すっかり生長したヒナが母鳥と湖を泳ぐのを間近かに観察しました。

**中国へ贈られた太郎・辰子の消息** 去る4月3日、動物親善大使として中国へ贈られた二ホンカモシカ、太郎・辰子について上野動物園に手紙が6月中旬にとどきました。北京動物園では3カ月、1年間位、園内の検疫舎で検疫を受けることになっているそうです。

太郎・辰子は別々の検疫舎で飼育されており、獣医さん1名、飼育係1名の2名が担当しているそうです。

一度太郎と辰子と一緒にしたところ、辰子が太郎に追われたので再び単独で飼育中であるが、検疫が終了一般公開する時までは、一緒にできると思う。現在は、飼育係と与えられる飼料にも馴れて、健康状態は良好であるそうです。上野動物園 中川課長談。

山と博物館 第18巻 第7号  
 発行所 長野県大町市TEL2021-11  
 印刷所 大町市大町山岳博物館  
 定価 年額四〇〇円(送料共)(切手不可)  
 郵便振替口座番号(長野)三二二九三